

くどくど述べる必要はあるまい。

翻つて、日本の各大学について見るとどうであろうか。日本では大学の数が著しく多い上に、諸外国にも増して大学間の較差があり過ぎるので、一概には云えない。しかし強いて分類して見ると次の様になるのではなからうか。

1) 官立の大学院大学理科系地理学教室、これに属するものので最も歴史が古く、講座も充実しているものは東京教育大学のそれだ、これについて、東京大学、東北大学等のものがある。都立大学のもの、公立とは云え之に準ずるとのと同様にしてよからう。これらは、多くの問題はあろうが、大体に於て欧米の大学の水準に達しているのではあるまいか。

2) 官立の大学院大学文科系地理学教室、これに属するものとしては、京都、名古屋、広島等の諸大学の地理学教室があげられる。理論的には文科に属するか、理科に属するかによつて、地理の内容に変化があるべきでなく、研究費等に特に不利を蒙ることがあるべきではないが、実情は日本の文科軽視の風潮を反映して、理科系のものに比して遜色のあつたのはやむを得ないことである。

3) 官立の文理系乃至教育系諸大学の地理学教室最も問題になるのはこの範疇に入る地理学教室であろう。この種の諸大学は戦前の師範、専門、高等等の諸学校の昇格したものであるが、予算及び定員は殆ど増額されぬままであり、しかも地理は多く社会科学系に入つてゐるために、文科系となつており、従つてこの十数年來殆ど改善のあとがない。試みにこの実例の一、二について見ても、パーターマン、レジュニアナロス、エコノミックジオグラフィー等は初号から揃つてゐるし、都下諸大学の向で古いものでお茶の水に比べればどう仕方がないということが云われている位である。このことは先輩諸先生の御盡力によるものと感謝すると共に、単に本学の至として在任、卒業生の勉学に資するばかりでなく、日本の地理学会のために資したいものである。

より夏より

心配のような安心な話

表海 重夫

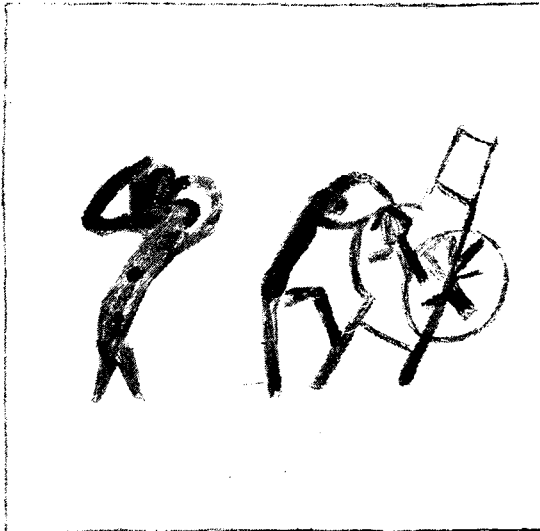


昨年の本誌に「学生時代の思い出」というテーマを与えられて、今更書かずとがなののがい思い出を記したので、今度はよき今の時代の学生諸君諸君の樂しげな生活ぶりを、見たままの印象記にしてノルマを課そうかと考えた。しかし当節の学生生活の実態を語つてわれわれの時代との相違を説明しよ

うと思う相手は、われわれの同輩や先輩たちであつて、このことを茶の木の池理に書くのはおかしきと気づいたから、何かほかの題材をさがして見ると、多少判違のある話のたぬを見出した。これは当世学生気質……ではなくて当世生徒児童気質に関するもので、悪書追放運動とも関係があり、卒業生諸賢のなかにも同じ問題で頭をなやましているむきが多いのではないかと思う。

今年中学に入った拙宅のせがれが、テレビ番組の「時代の人・ヒトラー」を是非見たいという。その希望たるや異常に熱烈である。日頃戦争ものや西部劇など、弾丸の打ち合いとか活劇的な場面に無条件に魅了させられてしまう年齢ではあるし、時刻は就寝にはまだ早い八時前後の宵の口で、見るなというのは教育上別の意味で面白くないから、だまつて様子を見ることにしたが、テレビの前での彼の期待に満ちた緊張の眼ざしはとうとうどうもたぐひではない。勉強のときにはこれほど緊張した顔を一度もしたことがない。たぐひにヒトラーのどこを見たいのか、ヒトラーはどんな人間だつたか知つてい

るのかと聞いてみると、はじめは音楽や美術なにかをやつたんだつてねと親父の目こ先を巧みにかわすようことを云う。しかしその後で、ヒトラーは自殺か戦死か自殺にしてその方法はよくわかつていないという話になつて、もしかするとまだ生きてい



生きていてどこか*

*で原爆かたんなか秘密に作つてい

るかとも知れないと眼を輝かせて云う。われわれの少年時代、非常時といわれを昭和十年前後から戦中にかけての軍国主義のいつの頃よりも、今の子供達に向けられた戦争物、軍記物のマスコミ攻撃はむしろはげしいとさえ恐られる。雑誌の数も多くなつたし、見るためには闘争本能をかきたてる内容が満ち満ちてくる。

その上テレビ、ラジオの視聴覚教育が読む手向さえはばいてくれる。もちろん今の子供は、科学者や偉大な政治家、芸術家の伝記などにも恐らく昔の子より強い関心をもつてい

私はいま自分のせがれの例を挙げたが、このせがれが特例なのかノーマルなのかをたしかめなければならないが、少くとも家庭内の家族環境からは戦争ものを支持する体勢は出るわけがない^(註)。雑誌は殆ど買っていないがテレビはかなり見る。更に学校での友達との会話、本の貸し借り(せがれの場合借りるだけかとしれないが)という交友関係がある。学校は日教組に加入していない先生たちぞからとくに戦争反対自衛隊非難を旗じるしにすることはないが、軍国軍粹主義をふきこむこともあるまい。

親正の子供むけマスコミ文化の動向からみて、わが家の子が決してアブノーマルなのではないと思う。

(註) 次表は父親とその息子(中学一年)の嗜好しらべ。×は不一致(息子は強い関心、親は無関心もしくは嫌悪)、△はや、近い(息子は強い関心、親はまんざらでもない)、○は一致(双方とも肯定)

軍隊、兵器への関心	×
ピストルの打合い	×
飛行機とくにジェット機に乗ること	×
西部劇を見ること	△
宇宙旅行	△
自動車	○
原爆反対	○

(但し表ざたに原爆賛成を唱える人はいないから反対と云つても意味がないか別の意味になる。ここではお題目程度の意味)

ところでこのような現代生徒児童気質の一般的傾向が事実とすると、これは憂うべきことなのであろうか。私はむしろ喜ぶべき現象ではないかと思う。男の子供には闘争本能が旺盛であり、またスーパーマン的存在にあてがれをよつ傾きが強い。よつと平均的に云えばの話で、私などは兵隊ごつこの経験は皆無に等しく、闘争的な遊びはあまりできない方だった。これは自慢にならない。子供たちが銃砲の打ち合いを見たりしたがつたりするのは本能的な欲求であつて、つまり楽しんでいるのである。

楽しむということは自分に危険があつてはできないことで、自分は安全で死ぬわけではないという安心感の裏づけがあつてはじめて充分に楽しめるのである。実際の戦場に出たら、恐ろしい方が先きで楽しむどころではないはずで、彼等にはそれとよくわかつていゝ。

だから、そんなにピストルいぢりや戦車が好きなら本当に戦争に行つたら

どうぞと聞くと、本当に行くのはいやだという。をだわれわれの時代のよ、に、肉親や身近な人に致死者や悲惨な引揚げ着の実相をみることがない、の子供たちは、戦争の実感など全く無くてをを飛び合い打ち合い殺し合うのを楽しんで見ているのである。

われわれの時代には戦争本能をむき出しにすると実際の戦場に結びついたので、案外それが抑制されていたのかと知れない。むしろ今は抑圧されずに子供のうちに思う存分マスコミの恩恵で発散され、大学生位になると全学連あたりで憲法改悪絶対反対を叫ぶ闘志になるのかと知れない。つまり困地マダムがよろめきたいのをテレビのドラマで発散させるのと一般で、決して不健全なものではない。

戦前戦中にわれわれはコンミニズムにひそかなる思慕をよせる時代の潮流をみたが、抑圧されるとかくやつてみたくなるものである。地下にひそんでうごめくところに一種の魅力があつたので、地上に出ってしまうと何のことはない。

英雄崇拜的思慕にしても、自分がその英雄になりたいとか、よこかになれるとかは考えていない(女の子なら人気女優か、トップレディ)。自分とまわりの友人とそういつた英雄になれつこはるいからおんなじだと安心しているので、素直にあこがれることができる。戦時中の中学生は実弾射撃の訓練をやらされたものどせがれに話すと、心から羨ましそうな風情でいるが、実際は戦争など今の日本にはないと安心し切つていての羨望である。

マスコミが今後の日本人に戦争をさせる原因とは考え難い。今の世の中には日本人で武器を持つ者は警官と教師以外にないから、誰と打合いのまぬはできない状態であり、戦争放棄の憲法は着実に子供たちの心に定着している。恐らく将来の日本人は戦争などできなくなるだろう。

戦争を起し又は参加する動機があり得ないし、軍隊を作つても精神的バックボーンのない無力な軍隊しかできないだろう。仮りにどこかの誰かの強力な施策で戦場はかり出されたとしても、隊長以下武器を捨てて戦場で武力放棄を宣言すれば勝負にならなくなる。オーいまの学校教育では困難に立ち向い滅私奉公する精神訓練など何とやつていないから、この子供たちが大人になつたら戦争はおろかけんかさえできない弱虫ばかりになるだろう。

戦争で利権を得ることにつながる一部の政治家、財界人といえどと、自ら又はわが子を戦場にさらすことはとういやであろう。

マスコミのまぬが一部の美言を子供に与える危険性を含んでいることと弊害である。わが家の事例ばかりで恐縮だが、ぬれタオルで人の顔をかさぐ

と人が殺せるんだつてぬ」とこれは小学三年の弟の方がある時真顔で云うので驚かされた。これはラジオからの知識らしいが、落ちついて考えるとこの子の場合それを実行する気づかいは先ず絶対がない。

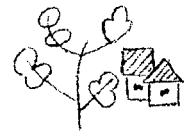
何か新しいことをしてみようという意欲ある子供には育てないで困っているくらいだから、しつとよかくも子供にそんな知恵を与えた罪はゆるせぬと思う。とつとよそれを扱ひ方次第で、とし遊びながらそんなまぬをしてゐる表情を見るとか、あやまつて他人がそのような状態になつた時に、死ぬか必知れぬと気づいて止めることかてこれだ、マスコミも商用であつたと云う結論になる。まぬのできる手口を教えるのは危険だが、知らないでいることと危険である場合がある。

要は知識以前のしつつけの問題に帰するので、わが子だけ特別に扱つて見えないさせないの学業偏重、意識過剰の教育ママさんこそ危険な存在というべきである。

(浅海)

お別れにあつて

吉田 栄夫



私は今夏、お茶の水女子大学から広島大学へ転任することになりました。都立大学から参つたのは、昭和三十一年の八月ですので、二年半ほどの間お茶の水に御世話になつたことになりました。いろいろな事情があつて、お茶の水の方の御都合が必ずしも良いわけではないのにも拘らず、勝手に言わせて頂いた次第ですが在任期間があまりに短かくて、大変申訳けないと思つています。つまり、ようやく今迄の不慣れを克服して、これからやつと多少の教師らしい事ができそうになり、何とか少しは御役に立てようになつて来たところで移つてしまうことになりました。申訳けなさのほか、惜別の思いを大いに感じております。

都立大学にいた頃、実習などで多少は学生諸君の学業の手伝いをする事もありましたが、何といつても大学の教師として教壇に立つたのは、お茶の水が初めてでしたので、この二年半の日月、多くの忘れ難い強い印象を受けましたし、それらはまた今後の私の歩む道の上に大きな影響を与えるものと思われまふ。

暑い日ざしの中で、テクテクと登つた浅岡、石尊山の頂さの昼食や、鬼首の自衛隊トラック便乗など、巡検の懐い出は殊の外鮮明です。また、居眠りをしたり、時に私語を交したりしながらも、慣れない、あまり面白くない講